内田 昭人
1983.9.10

平城宮第152次現地説明会資料

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は1978年以来、平城宮「第二次大極殿地区」の調査を継続的に進めてきた。今年度は大極殿閤門とこれにとりつく回廊跡を調査対象とし、二期に分けて発掘調査する予定である。今回はこのうち大極殿閤門と回廊跡の一部について報告する。調査は本年7月に開始し、現在進行中である。発掘面積は約3300㎡。

調査目的　今調査の目的は次の如くである。1）大極殿の正面に開く閤門（大極殿門）は朝堂で行われる儀式の際、天皇が出御する重要な施設であり、この閤門の規模と構造を確認すること。2）大極殿・大極殿後殿の下層からは奈良時代前半に遡る二棟の殿舎と、これを囲む掘立柱の塀が見つかっている。この塀の規模は東西のみ明らかで南北は未詳である。従って、南面の塀を検出して南北規模を確認すると同時に、正面に門が開くか否かを確認すること。3）記録では儀式に際し、大極殿前庭および閤門の南に各種の施設を設けている。こうした儀式に関連した遺構の有無を確認すること。

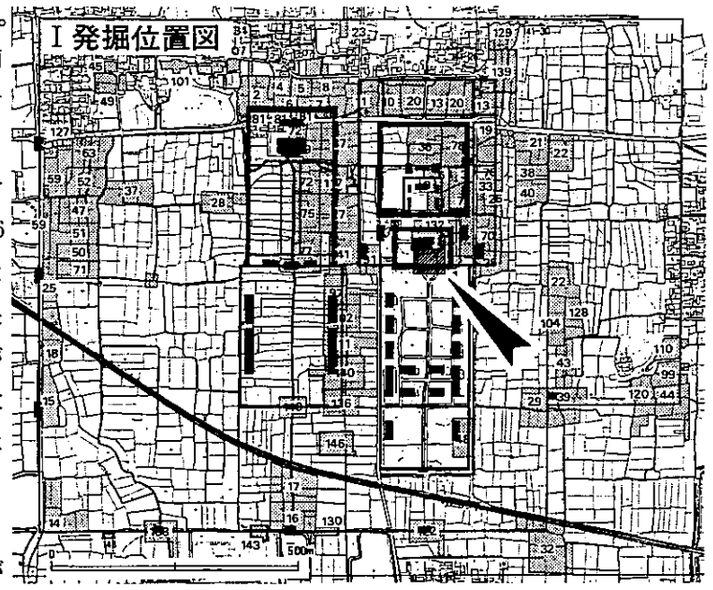
調査結果　調査によって閤門と回廊跡、大極殿院下層の掘立柱塀とこれに伴う門を検出した。さらに大極殿の前庭において、儀式に関連した舞台状遺構6、渡り状遺構、廊状遺構、および幢三と四神の旗を立てた竿の跡7か所などを発掘。閤門および回廊の南に於て、建物跡2などを検出した。これらの遺構は奈良時代前半と後半、平安時代以降の三期に大別できる。

奈良時代前半の遺構　門SB 002は下層の正殿SB 9140の南正面に開く5間2間の掘立柱基壇建物である。基壇は削平され、棟通りの南側のみ基底部の版築層が遺存していた。掘立柱は基壇築成後に建てたもので、すべて抜き取った痕がある。柱間は桁行の両端間のみ3m（10尺）で、中三間と梁間は4.5m（15尺）等間で、桁行総長は19.5m、梁行総長は9mである。基壇の出は、SB 002が大極殿閤門と重複しているため、明確ではないが、現状では東・南・西について約1.5mである。

SA 003・10048はSB 9140・10050を囲む掘立柱塀の南面と東面の塀である。SA 003は門SB 002の妻柱にとりつき、門から9間目でSA 10048に接続する。SA 10048は27間分あり、これによってSB 9140・10050を区画する塀が南北80m（270尺）、東西71m（240尺）の規模と判明した。

奈良時代後半の遺構　閤門は5間2間の礎石基壇建物である。SB 002の棟通りから6m南を棟通りとし、SB 002の基壇の北側を削り、東・南・西側に基壇をつぎ足している。南縁は地山を削り出した上に基壇土を積む。基壇上面で礎石の根石とその据えつけ掘形を9カ所検出した。柱間は桁行・梁行とも4.5m（15尺）等間で、桁行総長は22.5m、梁行総長は9m。基壇の出は桁行・梁行とも1.5m（5尺）である。基壇の南北中央には幅13.2mの階段があり側面には複廊外側におりる階段がある。これは閤門側面の地覆石の痕跡が複廊内側のみにあることによる。基壇の外装は凝灰岩切石の壇正積で、基壇の北側にのみ雨落溝がある。大極殿回廊は東西122m、南北88.7mの複廊で、柱間は桁行が3.9m（13尺）、梁間が3m（10尺）である。現在南面東回廊を8間分検出。閤門同様、南縁は地山を削り出し、その上に基壇土を積む。基壇は幅が約9.2m、北側にのみ雨落溝がある。回廊の礎石は全て抜き取られている。閤門から3間目の基壇南縁には、地山を削り出した階段の痕跡がある。階段の幅は1間分（13尺）であろう。

大極殿の前庭には儀式に関連した建物や遺構がある。これらは4期に区分できるが、調査の途中であり、概略を述べるにとどめる。

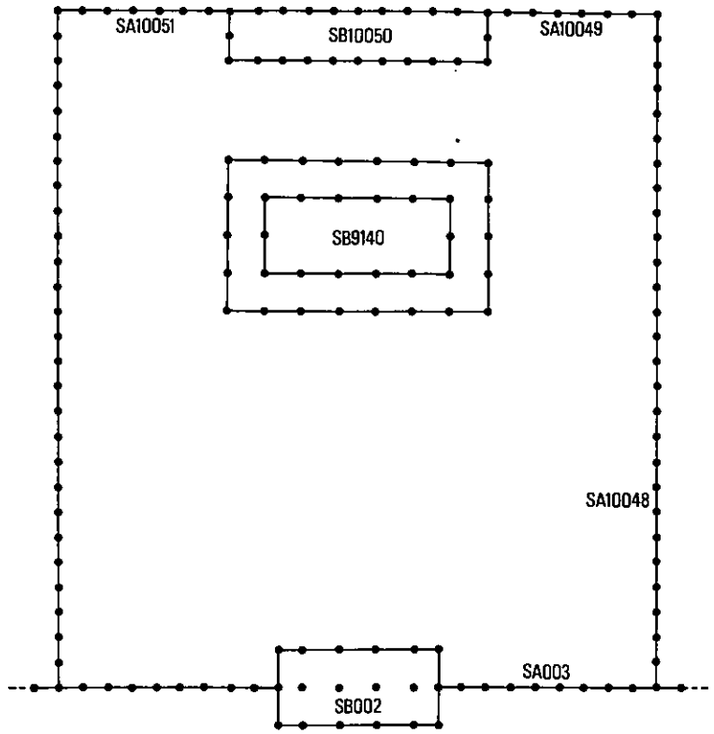


大極殿の東西には、大極殿の南の側柱に筋を揃えた5間3間片面廂の南北棟SB 10034・9141がある。柱間は桁行・梁行とも3m（10尺）等間。SX 006は大極殿の階段の南3mに位置する廊状遺構。9間1間の中央間の南に3間1間の張り出しがつく。東西の規模と柱間は、大極殿の桁行規模と揃え、柱間は両端間が3.6m（12尺）、その他は4.5m（15尺）等間である。但し南側の張り出し部は桁行が3.7m(12.5尺)等間である。この廊状遺構と重複して11間の掘立柱塀SA 007がある。

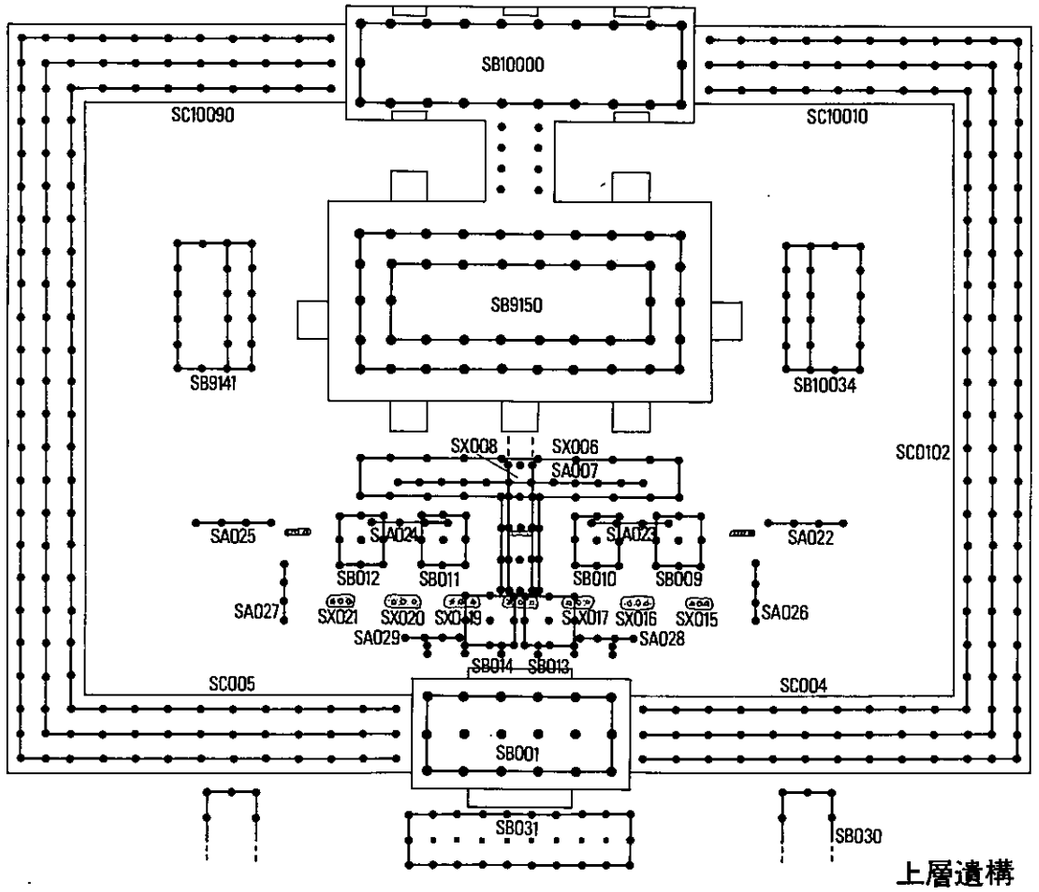
SX 008は、SX 006の後に設けられた4間2間の渡り状遺構。北端は大極殿の中階の南4mにあるが、中階までのびる可能性がある。桁行は3.7m(12.5尺)等間、梁間は1.5m（5尺）等間。SX 009～014は2間2間の総柱の舞台状遺構。角柱を用い、柱間はSX 009～012が東西2.7m（9尺）等間、南北3m（10尺）等間であり、SX013・014は3m（10尺）等間である。SX 009～012は大極殿・閤門間の中心に位置する。SX 008～014の7棟は一連の遺構であろう。SX015～021は大極殿の基壇の南24m（80尺）にあり、SX 013・014の掘形を切って掘られた東西4m、南北1.5m程度の不整隋円形の掘形である。内部には各々3カ所ずつの柱痕跡があり、中央の柱痕跡の径は30cmを越える。両側の柱は中心の柱を支える脇柱である。この巨大な7カ所の掘形は『続日本紀』などの記録に、元日朝賀や即位式に大極殿前に立てたとみえる銅烏・日像・月像の幢（どう）と朱雀・玄武・白虎・青龍旗の竿の跡であろう。このSX 015～021を囲むように3間の掘立柱塀が8条（SA 22～29）ある。これは塀というより、各種の旗や威儀物などをならべた施設の可能性がある。

SB 031は閤門の南にある9間2間の掘立柱東西棟建物。中心を閤門心に揃え、柱間は3m(10尺)等間。棟通りに床束があり床張り。柱はすべて抜き取られ、抜き取り穴には凝灰岩、瓦が入っている。SB 030は大極殿回廊の南　閤門心の東34mにある掘立柱南北棟建物。梁間2間で桁行は2間分のみ検出している。

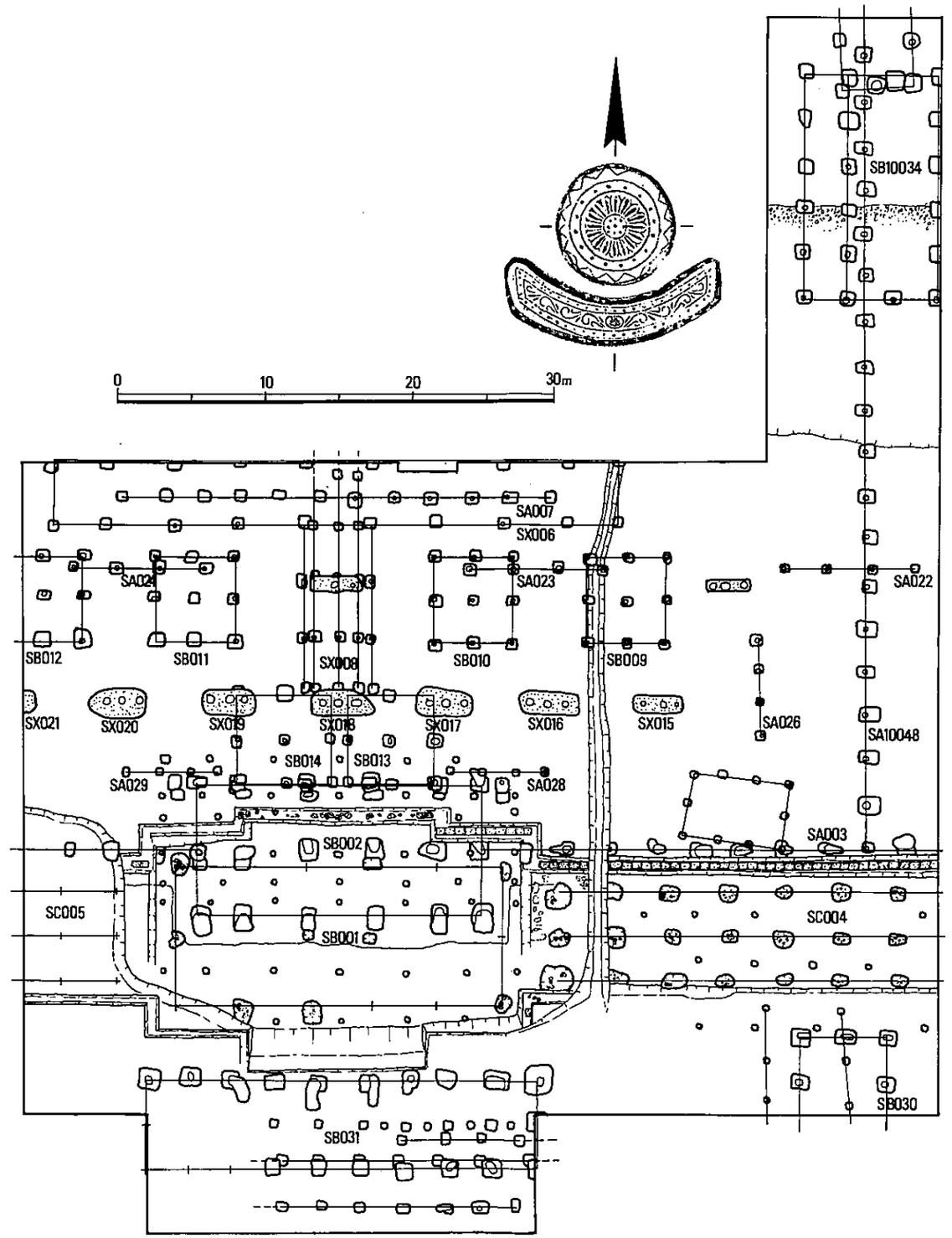
まとめ　調査は既述のごとく、ほぼ所期の目的を達した。これらの成果は、平城宮のみならず、わが国の古代都城制の変遷を研究する上で重要である。また、大極殿前庭で検出した儀式関連遺構は、従来文献解釈が中心であった宮廷儀式の研究に新しい視角を与えるものとなろう。



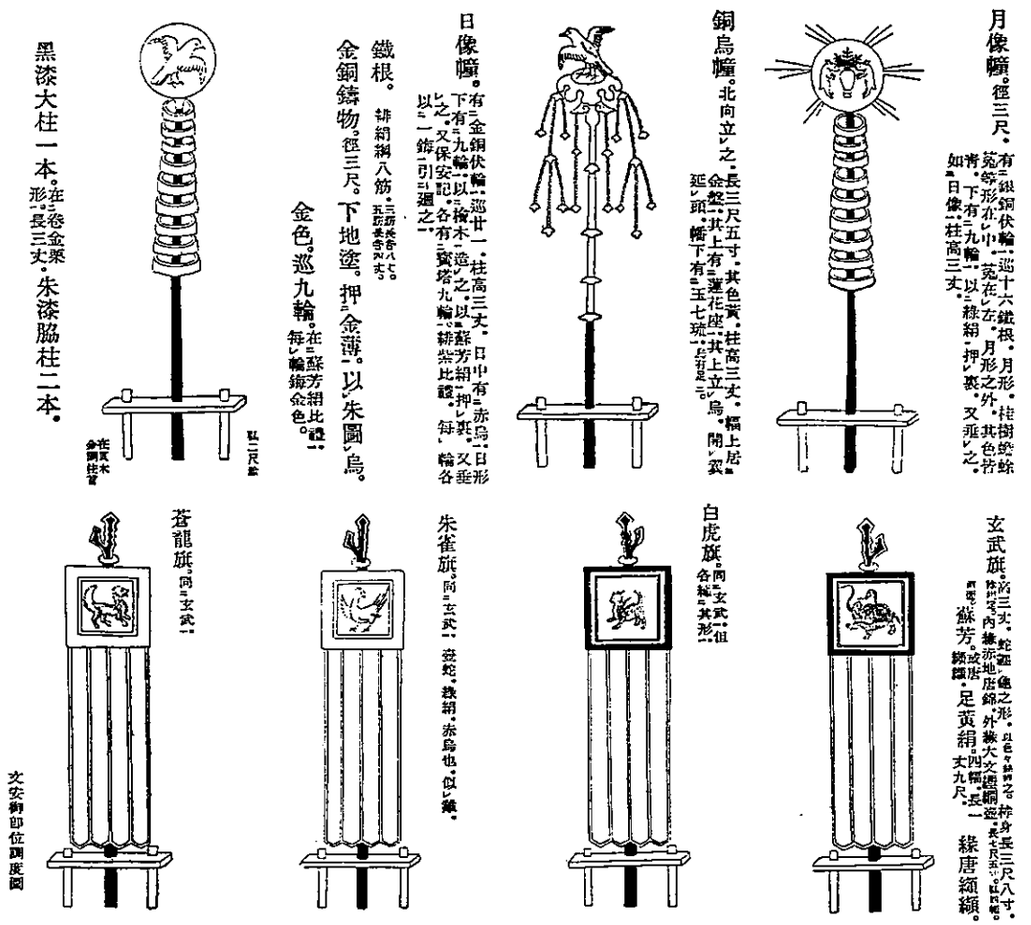
下層遺構



上層遺構



平城宮跡第152次発掘調査遺構図



大極殿・閤門関係史料

1　即位　元日朝賀

a 宝亀元（770）年10月1日

天皇の位に大極殿に即く。　（光仁天皇）

b 天平宝字7（763）年1月1日

大極殿に御して朝を受く。文武の百寮及び高麗の蕃客、おのおの儀に依りて拝賀す。

c 大宝元（701）年1月1日

天皇　大極殿に御して朝を受く。その儀、正門において烏形の幢を樹つ。左は日像・青竜・朱雀の幡・右は月像・玄武・白虎の幡なり。蕃夷の使者・左右に陳列す。文物の儀　是に備れり。

d 延喜式兵庫寮

凡そ　元日及び即位に宝幢等を構え建つは……寮、木工寮と共に幢の柱管を大極殿の前庭竜尾道上に建つ。……宝幢を構え建つは殿の中階より南に去ること十五丈四尺に烏像の幢を建て、左に日像幢、次いで朱雀旗、次いで青竜旗、右に月像幢、次いで白虎旗、次いで玄武旗なり、相去ることおのおの二丈ばかり。

2　饗宴・奏楽

e 天平宝字7（763）年1月17日

帝　閤門に御して五位已上及び蕃客、文武百官主典已上を朝堂に饗す。唐・吐羅・林邑・東国・隼人等の楽を作し、内教坊の踏歌を奏せしむ。

f 延暦2（783）年1月28日

大隅薩摩の隼人等を朝堂に饗す。その儀常のごとし。天皇、閤門に御して臨観す。

3　法会、その他

g 天平9（737）年10月26日

金光明最勝王経を大極殿に講ぜしむ。朝廷の儀は一に元日に同じ。

h 神護景雲元（767）10月24日

大極殿に御し、僧六百を屈して大般若経を転読せしむ。唐・高麗の楽及び内教坊の踏歌を奏せしむ。

i 年中行事秘抄

称徳天皇天平神護二年正月八日、大極殿に於て御斉会を修し始む。

j 天平元（729）年8月5日

天皇　大極殿に御し詔して曰く、……是をもって神亀六年を改めて天平元年となす。……

k 延暦2（783）年2月5日

天皇　大極殿に御し詔して、故式部卿藤原朝臣百川に右大臣を贈る。……